

之より起れるなり。

鹽竈より海に出づれば、即有名なる松島にて、大小の島々きながら、碁盤に石を散したるが如く、群れり。俗に呼びて、八百八島、といふ。島皆緑の松を蔽き、四時の景色若よく、我國三景の一に數へらる。海中多く、鰐、沙魚、牡蠣等を産す。島の内にて大なるは宮戸島、寒風、淨島、桂島等なり。松島村に鹽竈寺、觀瀾亭、五大堂あり。稻巖



寺は本縣第一の大寺にて、政宗公の建立にかゝり、結構莊嚴、本堂に公の像あり。作道街道は廣瀬川に沿ひて、仙臺より山形縣に通ずる道路なり、沿道に作道温泉あり。

第八課 黒川町

黒川町は、其の位置、恰郡の中央に當りて、郡役所の在る所なり、仙臺を距る北六里、陸羽街道の一小都會にて、中新田（中ノ新田）、岩出

山（山形）等を経て、

秋田縣に出づ

る羽後街道こ

こより分る町

の北なる中興

寺に孝慈仁の

碑あり。

仁女は今より

八十餘年前の



人なり家貧しかりしかば、自生業を営みて、病夫と老祖母とを養ふこといと懇なり。人之に他に嫁ぐべきを勸むれども従はず。此の如くすること多年、遂に病みて死せしかば、後の人碑を立て、之を旌せりといふ。

西に七箇の山あり、總稱して七森といふ。就中最大なるを大森とす。吉田川、其の麓を流れて、品井沼に入る。郡内多く馬薪炭を産す。

第九森

加美郡

中新田町は郡役所の在る所なり。吉岡町を距る西北三里餘、鳴瀬川、其の南を流る。北の



順能く父母に
事へ、夫にかし
づきしが、其の
父、夫を悪むこ
と甚しく、遂に
罪を構へて、之
を官に訴へし
かば、辰女從ふ
所を知らず、悲



しみの餘り、自殺して、果てぬ官、其の孝貞
を賞して、厚く之を葬り、父の罪をも免せ
りといふ。

松山町は、三本木町の東に在り、昔、茂庭氏
の領地なりき。

此の地方は、土地率平坦にて、沃野數里に
亘る所謂大崎、廣土と稱するもの是なり。
南に品弁沼ありて、多く鱧、鰻等を産す。其
の水、洞穴を通りて、宮城郡の高城川とな

る。

第十一課 王道郡

岩出山町は、仙臺を距る北十二里餘郡役所の在る所にて竹細工及水豆腐を出す町に、岩出山の城趾あり。

此の城は天正十九年（一六一一）より十餘年間、政宗公の居城なりしが、仙臺に移るるに及びて、第四子宗泰、其の後をうけ、子孫代々此を領せしが、正人に至り、北海道

開拓の功に因り、近年華族に列せられたり、町の南に名生の城跡あり、菅大崎氏の居りし所なり。

町の北を流る、川を荒雄川（あらいづみ）といふ。上流に禿嶽（かぶたけ）、荒雄岳、花瀧山等あり、此の諸山の谷間を鬼首（おにくび）と云ふ。鬼首は古來多く駿馬を産するを以て、其の名世に高し、殊に金華山、宮城野等は尋なくも、御料となりし名馬なり。

鬼首の東、鍛冶屋澤に軍馬補充支部あり、

多く軍

馬を飼

ふ。

花澤山

の東麓

に、本山

あり、近

傍、又、硫黄を産す。此の邊すべて、火山脈に



花澤山

當れるを以て、古噴火せし山多く、温泉所
所に湧き出づ。鳴子川、渡、荒湯等、其の名あ
るものなり。一種奇なるを吹上温泉とす。
晝夜數回、時を定めて、高く空中に湯を吹
き上ぐる。こと三四丈に及ぶ。其の勢烈し
く、雲雷の如し。

鍛冶屋澤より西、鳴子原、前中山を経て、山
形縣に出づ。道路を、北羽前街道北羽前街道とす。

といひ、鬼首を經、秋田縣に出づ。道路を

羽後街道といふ。

第十二課 遠田郡

瀧谷町は郡役所の在る所なり、此の地江合川に沿ひ、小牛田の停車場（現、JR 小田原駅）に近く交通の便あり、伊達重宗以下、代々こゝを領し、其の見隠寺（現、伊達見隠寺）に有名なる伊達安藝の墓あり。

伊達安藝（現、伊達安藝）名は宗重、重宗の孫にて、今より凡二百三十年前の人なり、其の頃政

宗公の子に、伊達兵部（現、伊達兵部）といふものあり。



かねて、
本家を
奪ひ取
らんこ
どを計
り、富主
綱宗公

を廢し、其の子龜千代君（現、龜千代君）を立て、己專國

政を取り、原田甲斐（甲斐守）などを近づけ、忠義の人々を退けて、密に幼主の身を危うせんと企てき、安藝其の謀を知りて、之を幕府に訴へしかば、やがて安藝と甲斐とを召されて、吟味ありしに、兵部等の悪計、悉く露はれければ、甲斐其の坐に安藝を斬り、己また、ここに殺されき、かくて、兵部は遠方に流され、其の徒皆罪せられぬ、世に之を仙臺騒動といふ。

町の東に露獄あり、平野の間にありて、眺望よろし、其の處なる黄金（金）、迫に黄金山神社あり、凡一千百年前、我が國にて始めて黄金を



掘り出し、どころなり。名越沼は、其の南にあり。下郡沼は、其の北にありて、共に魚鳥多し。

第十三課 栗原郡

築館町は、陸羽街道の一驛にて、郡役所の在る所なり。岩崎町は、昔中村氏の領せし所にて、馬市を以て名あり。

中村氏に日向義規ヨシノリといふ人あり。年二十七にして、伊達氏の家老に擧げられ、

重村齊村周宗の三公に歴史し、藩政を執ること、凡十七年。其の間伊達氏の危難を救ひしこと、少なからざりき。

近傍尾松村の



菅田は菅田村將軍菅田村及入幡太郎菅田村の
兵を屯せし所なり。

若御町は、追川に跨り石越の停車場若御町、
産地を以て開ゆ南に伊豆沼あり、則七
里餘、縣下第一の大沼にして、魚鳥多し。
栗駒山は、郡の西北隅に聳えたる高山に
て、又駒嶽といふ山麓に温泉多し、山の南
方に細倉、鉛山あり、縣下第一の鑛山なり。

栗駒山より發する川三あり、一ノ追、二ノ
追、三ノ追といふ、下流合して、追川となる。
北の邊、一面の平野を金成、廣土といふ。

第十四課 登米郡

佐沼町は、郡役所の在る所にて、追川に跨
り、水陸交通の便あり、町の北なる城址は、
大崎、葛西の遺臣一揆を企て、政宗公に攻
め落されし所なり。

登米町は、北上川の西岸に在る一都會に

て、水運の便あり昔葛西氏の居りし處にて、其の後伊達宗直以下代々此を領しき町の北に其の城の跡あり、郡の東北隅な



る根河原は煙草の産地を以て名あり、北上川は遠く岩手縣より來り、郡内を貫流し、桃生郡に入る、本郡は土地肥沃なれども、低平なるを以て、水害を受くること、多からず。

第十五課 桃生郡

飯野川村は、郡役所の在るところなり、北上川は、登米郡より來り、道江合の二川を合せ、鹿又に至りて、二派に分れ、一は、牡鹿

郡に入り、一は東に流れ、追波川となりて、海に注ぐ。河口に近く、長面尾崎の鹽田あり。桃生村に陸奥介坂上高道の墓あり。人呼びて貞觀石。又は山田の碑といふ。本縣古碑の一なり。高道は、今より一千餘年前、陸奥國に下り、任にあること五年、蝦夷と戦ひて、終に、此に死せし人なりといふ。



硯石盤等を出す。雄勝石と稱するもの。是なり。

十五溪村の雄勝濱は、玄昌石の産地にて、

廣瀬村に廣瀬沼あり。灌溉の利多し。東名

の鹽田は野蒜港の西に連なる港の南端に不老山あり海に臨みて眺望よし。

東名より野蒜を経て北上川に至る一條の運河あり長さ五里許舟行の便多し其の北上川より野蒜に通ずるものを北上運河又野蒜運河といひ野蒜より東名に至り松島灣に通ずるものを東名運河といふ。

第十六課 牡鹿郡

石巻町は北上川の河口にあり人口一萬八千餘市街の繁盛なること仙臺市に次ぐ郡役所測候所等あり此より桃生郡の小野を



經て、仙臺に通ずる道路を、石巻街道といふ。此の地古は海濱の一漁村に過ぎざりしが、今より凡二百七十年前、政宗公其の臣川村重吉に命じて、鹿又よりこゝに至るまで、凡三里の間を掘り、北上川の水を引かしめしより、今の如く繁華の港とはなれるなり。鹽竈、萩、氣仙沼、及岩手縣の一關へは、毎日小汽船の往復あり、川の東なる多福院に、後醍醐

天皇御菩提の爲に建てたる碑あり。近傍、萩井村より、井内石を産す。碑、橋等を造るに適す。世に、仙臺石と稱するものなり。

鹽波町に鹽田あり、其質の食鹽を産す。これより東、陸地遠く南に延ぶるものを、牡鹿牛島といふ。萩濱は、牛島の西岸に在り。横濱箱館間、航路の中間に當り、汽船の出入多し。萩濱の西北に、月浦あり。支倉六右

雷門の外國に渡りしとき、船出し、其の後
 復歸り着きしところなり、
 金山、山は、牛島の東にある島にして、周回
 五里高き千五百尺、頂上より大洋を望め
 ば、壯快極りなし、海上の船、遠く之を望み
 て、航海の目標とす、山腹に、黄金山神社あ
 り、社邊に、鹿多し、其の東南端に、燈臺あり、
 此の島と牛島との間なる海峡を、山、地、渡



といふ、牛島の西に、網、地、田、代、の二島あり、

共に漁業盛なり、

第十七

本吉

郡

志津川町は、東北海岸の一都會にて、郡役

所製林場等あり、仙臺を距ること二十二里、これより西水界、崎の隱道を過ぎて、登米郡に出づべし、又南、桃生郡の小野よりこの町及、氣仙沼町を経て、北岩手縣に通ずる道路あり、之を陸前東濱街道といふ、氣仙沼町は、志津川町を距る、北十里にあり、本縣極北の市街にて、釜前浦に臨み、船の出入多く、繁華なる港なり、浦の東岸に御鳴穴あり、洞中鐘乳石多く垂れて、一奇

觀をなす、前面に大島あり、周圍五里、漁業盛なり、

郡内海苔を産す、其の質、良好なるを以て、遠く他方に出す、又、處々に鹽田あり、かゝる産業の、此の地に起りしは、實に猪狩、新兵衛の力なり、新兵衛ハルカは、氣仙沼町の人にて、思慮深く、忍耐頗強かりき、其の家も、海産物を商ふ問屋なりければ、屢、江戸、大阪に廻船して、商賣を営みけるが、常

に、失敗のみ打
續きて、資産を
失ふに至れり。
されど、新兵衛
更に属せず、海
苔の製法を試
み、又製鹽の業
を創めしに、孰
れも、好結果を



得て、次第に其の業を弘め、終に、以前に勝
る富豪の身となり、之が爲に、業を得しも
の、亦、甚多かりしが、明治十年十月、没しぬ
里人、其の恩澤を慕ひ、祠を建て、之を祭
り、官、亦、其の功を追賞せり。

本郡沿海の漁村は、明治二十九年六月十
五日、海嘯の爲に、概、非常の害を被れり。

磐城國の内三郡列田、伊具、亶理面積總べて、四百六十八方里、人口八十三萬餘、戸數十二萬餘あり、郡の最大なるは、栗原郡（註）にて、最小なるは、亶理郡（註）なり、人口は、仙臺市の外志田、遠田、牡鹿三郡最密にして、加美郡は、最疎なり。

ABO

第十九章

第十九章 地勢

本縣は、東方一面海に向ひ、其の他の三方すべて、山にて圍まる。北方の栗駒山は、縣内第一の高山にて、南方の刈田嶽、之に次ぎ、舟形山、其の中央に在り、此等の連続したる一帯の山々を名づけて、奥羽山脈といふ。火山脈なるを以て、温泉多し。本吉郡に近き室根山（註）より來れる北上山脈は、南に延びて、牡鹿半島となる。故に、本吉、牡鹿の二郡は、山多し。

北上川は、奥羽第一の大河にて、岩手縣より來り、追江合の二川を合せて、海に注ぐ。全長七十餘里あれども、縣内を流るゝこと十七里に過ぎず。阿武隈川は、福島縣より來り、白石川を合せて、海に注ぐ。之を本縣の二大河といふ。共に舟楫の便少からず。此の両河の流るゝ地方は、土地低平にて、自南北の二大平野を爲せり。北部の平野には、沼多し。伊豆沼、品井沼は、其の大なるものなり。

湖の大なるは、松島湖にて、島の大なるは、宮戸島なり。

第二十課 氣候

氣候は、地方によりて、多少の相違あれども、夏は短く、暑さ緩かに、冬は寒さ稍嚴しく、殊に山地は、降雪多し。風は、概強く、冬は、西北風、夏は、東南風多し。雨は、夏多く、冬少し。

第二十一課 都會

仙臺市は、縣下第一の都會にて、石巻町之に次ぎ、古川町、又之に次ぐ。此外、人口五千以上の郡邑は、總て十三あり。岸にありて、いづれも生業盛なり。

第二十二課 交通

本縣は、海陸共に、交通運輸の便あり。道路は、陸羽街道陸羽街道の南北を貫き、其の他

の街道は、是より縦横に通ず。縣外に出づる道路は、すべて十八條あり。

- (一) 山形縣に通ずるもの七、北羽前街道(中山越)中羽前街道(母竈越)作並街道(關山越)二口街道(山寺越)笹谷街道(南羽前街道)七宿越及南羽前岐街道(高畑に通ずるもの)これなり。作並街道を以て本道とす。

- (二) 秋田縣に通ずるもの二、羽後街道(鬼

首越羽後岐街道(花山越)これなり。

(三)岩手縣に通ずるもの四陸羽街道陸前東濱街道一關街道涌津に通ずるもの及一關東街道千厩に通ずるもの是なり。

(四)福嶋縣に通ずるもの五陸羽街道南羽前街道(小坂)に通ずるもの柴川街道相馬街道中村に通ずるもの及陸前濱街道これなり。

東北鐵道は福嶋縣より來り陸羽街道に沿ひて岩手縣に入る其の間岩切より鹽竈に通ずる支線あり常磐鐵道は岩沼より分れ陸前濱街道に沿ひて南福嶋縣に入る。

舟行の便は北上川を第一とし阿武隈川迫川之に次ぎ北上運河東名運河貞山橋等亦多し但港灣は諸處にあれども其港少し。

郵便は如何なる村落にも達せざるとこ
ろなく電信は重なる町に通ぜり、
第二十三課物産
本縣は南北に大河ありて其の間沃野多
く東方一面海に臨むが故に従ひて農産
及水産に富めり殊に農産は縣下物産の
過半を占む、
農産物は米を第一とし大豆大麥之に次
ぐ米は世に仙臺米と稱し又木石米と呼

ぶ其の産額一
年凡百二十萬
石にて年々外
に出すもの二
十餘萬石あり
栗原郡は收穫
最多く牡鹿郡
は最少し釀酒
の業は各地に

農産物



行はれ、仙臺殊に盛なり。

大麥は、食料に供し、又、牛馬の飼料となす。其の産、三十萬石あり。大豆は、古來、著名の物産にて、謂はゆる仙臺味噌は、これにて造るなり。

養蠶、製絲は、縣内至る所に行はれ、伊具郡を以て最盛なりとす。製絲場の有名なるは、伊具郡の金山、本吉郡の志津川、志田郡の古川等とす。縣下、養蠶によりて、得ると

ころ、亦、一年、二百萬圓餘に上るといふ。

産馬は、古來、世に名あり。玉造、加美、栗原、黒川四郡を重なるものとす。鬼首馬の名、殊に著はる。牧牛場は、刈田郡、玉造郡等にあり。

海産物は、鮎、鰯、鱈、鰹、烏賊、章魚、鯛等の魚分多く、海藻には、海苔、石花菜、海藻、和布等を出す。漁業の盛なるは、牡鹿、本吉二郡にして、桃生、宮城二郡之に次ぐ。其の他、大な

る河々には、鯉、
 鯛、鮎等を産し、
 沼よりは鯉、鮎、
 鰻等を産す。是
 等の價額合せて、
 一箇年凡百
 萬圓餘なり。
 製鹽の業亦、行
 はる。毎年産額



凡十萬圓。牡蠣、本
 吉、桃生三郡を多
 しとす。

鐵産物は、多から
 ざれども、栗原郡
 の鉛を第一とし、
 玉造郡の銅、硫黄、
 登米、本吉二郡の
 石灰之に次ぐ。



製造品は、仙臺市の絹織物、理木細工、刈田郡の酒類、名取郡の紙、藍名取、栗原二郡の養蚕、栗原郡の蚊帳、玉造郡の漆器、純生郡の石盤、硯、及各地の木綿織等を重なるものとす。

以上の物産中、産額の最多きものは、米、生絲、魚類の三種にて、乗馬、仙臺平は、日本第一の稱あり。

第二十四課 沿革

今の陸前磐城の國名は、明治元年に始まり、昔は、此の邊を、廣く陸奥國といひしが、今より、凡千二百年前迄は、猶蝦夷人多く住み、屢朝廷に叛きしかば、多賀城を置き、て之を征伐せられけり、後田村將軍、終に盡く之を平けしより、蝦夷人は、遠く、北の方に退けり、其の後、また、豪族どもの、私に、此の地方を領するものありけるを、源義家、頼朝公等、前後之を討ち平けぬ、頼朝

公の時伊達氏の祖朝宗公其の軍に従ひて功ありき。

其の後は世の中阻れて戦争止むことなく、牡鹿、桃生、本吉、登米の四郡は葛西氏の領地となり、栗原、玉造、加美、志田、遠田の五郡は大崎氏の領地となり、厩川より南は悉く伊達氏に屬しぬ。

やがて葛西大崎とぶるに及びて、本縣は勿論岩手縣の南方まで、二十一郡の地す



伊達氏領地

べて、政宗公の領となれり。是、今より凡三百年以前の事なりとす。是より伊達氏十三代の間、仙臺城に在りて、此の地方を治め、之を仙臺領又は、仙臺藩といへり。明治維新の後、廢藩となり、數縣に分れしが、五年一月終に、今の宮城縣とはなれるなり。

宮城縣誌

明治三十一年十月十五日刊
明治三十一年十月二十日發行
明治三十三年六月一日刊
明治三十三年六月五日刊

宮城縣教育會

發行所

武田 高 部

印刷所

英 舎

二六七

